

Karen Blixen「ペーターとローサ」”Peter og Rosa”, Naja Marie Aidt「花盛りの庭」”Den Blomstrende have”に見る思春期の諸問題について

デンマーク語専攻 松原緋色

目次

1. はじめに
  - 1.1 研究の背景・目的
  - 1.2 思春期について
2. Karen Blixen「ペーターとローサ」”Peter og Rosa”
  - 2.1 作家紹介
  - 2.2 作品紹介
  - 2.3 当時の家族像・子ども像
3. Naja Marie Aidt「花盛りの庭」”Den blomstrende have”
  - 3.1 作家紹介
  - 3.2 作品紹介
  - 3.3 当時の家族像・子ども像
4. 思春期における心身の成長～アイデンティティの確立
  - 4.1. 「ペーターとローサ」”Peter og Rosa”
    - 4.1.1. 個としての成長
    - 4.1.2. 二人の関係性にみる変化
  - 4.2. 「花盛りの庭」”Den blomstrende have”
    - 4.2.1. 個としての成長
    - 4.2.2. 三人の関係性にみる変化
  - 4.3 二作品の比較
5. 思春期における「愛」の位置づけ
  - 5.1. 「ペーターとローサ」”Peter og Rosa”
  - 5.2. 「花盛りの庭」”Den blomstrende have”
  - 5.3. 二作品の比較
6. まとめ
  - 使用テキスト
  - 参考資料
  - インターネット上の資料

## 要約

本論文は、カーアン・ブリクセン(Karen Blixen)「ペーターとローサ」"Peter og Rosa"とナヤ・マリーイ・アイト(Naja Marie Aidt)「花盛りの庭」"Den Blomstrende have"の2作品を思春期という観点から分析したものである。「ペーターとローサ」は15歳の少年と少女、「花盛りの庭」は14歳の少年2人を主人公として、自らの生き方に悩む姿や身近な人との関わり方の変化が描かれている。子どもが大人になるにあたって重要な時期である思春期が、個人にとってどれほど大きな影響をもたらすかということ考察している。

第1章では本論文の研究の背景や目的、思春期の定義について述べる。思春期における諸問題に関して、子どもたち自身の変化と外部からの影響、子どもたちにとっての「愛」の位置づけというテーマに焦点を当てて示した。第2・3章では、ブリクセンとアイトそれぞれの紹介、作品のあらすじ、作品が書かれた時代と作品の舞台となっている時代における家族像・子ども像について述べた。当時の家族像・子ども像が作品にどのように反映されているかに関して考察した。

第4章では、思春期における心身の成長が、どのようにアイデンティティの確立や他人との関係性に影響を及ぼすのかということ考察した。「ペーターとローサ」における子どもたち自身の変化として、背が伸びるといふ身体的成長に伴い精神的成長を遂げている様子が描かれている。互いに自分の殻に閉じこもることで、自分自身の立場について改めて考えるようになる。ローサもペーターも父親の存在や読書を強制されたことにより死を身近に感じるようになる。この場面から、周囲の人間や環境によっても思春期における人生観が形成されると考察した。また、作中ではペーターとローサの関わり方の変化についても述べられている。幼少期についても振り返る形で語られており、互いの考えを理解し合うことのできないなかで、純粹に友人として仲良く過ごしていた幼少期を思い出している場面が登場するが、ここから大人へと成長していく思春期だからこそ、幼いころに戻ることができないという不安を表していると考えた。

「花盛りの庭」においては、それまでいつも一緒だったトマスとイーレクが、イーレクの恋をきっかけに、相手の知ら

ない部分が浮き彫りにされる。つまりイーレクの恋の進展とトマスのイーレクに対する恋心である。トマスの視点からイーレクが大人びて見える様子と自身が幼いままであることへの焦りが対比されて描かれており、思春期における他人との差が子どもにとって苦悩する大きなポイントであることが窺えた。また、トマスがイーレクは自分とは違う人間であると認識し、苦手だったメデを個人として受け入れる場面から、自らの想いや考えを整理することで相手を理解する余裕が生まれ、成長につながると捉えた。

第5章では2作品における登場人物にとっての「愛」の役割を考えた。「ペーターとローサ」において、牧師は父親として子に向けての愛ゆえにとった行動が反発を招くこととなる。ペーターのローサに向けた愛は、友人として愛していた幼少期や二人の将来を思わせるような場面から、二人の人生そのものであると考えた。ローサのペーターに向けた愛は、ペーターを可愛がっていた過去や終盤でペーターを勇気づける場面から、自身を強くするための愛であると結論付けた。

「花盛りの庭」では、イーレクに対して友愛から恋愛感情に変化していくトマスも、メデに対して今年になって恋愛感情を抱き始めたイーレクも、恋愛感情を持つことで自らの気持ちと向き合うことができた。このことから、人を愛するという経験が自身の成長の糧となっていると考えた。

第6章のまとめでは思春期において自身と周囲の差を実感し、他人に考えを理解してもらえないことが子どもたちにとっての葛藤となっていることをまとめた。思春期は自分自身だけでなくそれまで育ってきた環境も大きく影響するため、自分自身でコントロールできるものではない。また、思春期の特徴として他人に愛情を向けることが挙げられる。「ペーターとローサ」では時間は要したが二人ともが恋愛感情を自覚した。「花盛りの庭」では特にトマスの同性への恋愛感情が大きな特徴であったが、一人で心の整理をつけた。以上より思春期は、子どもたちが自ら考え解決する力を養う時期であり、また他人を愛することが通過儀礼的な役割を果たすと結論付けた。